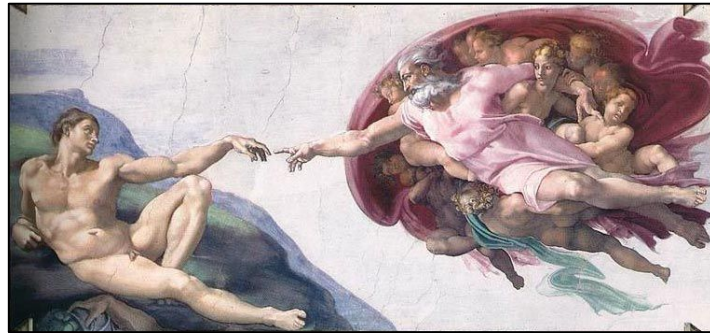


世界遺産アカデミー特別講座 隔週連載第1回 『ルネサンスとは何か？』

前ユネスコ事務局長顧問 服部 英二



『アダムの創造』

世界遺産アカデミーでの講演は2回目になります。

私は、1973年にパリ、ユネスコ本部での勤務を始めたので、世界遺産条約の歴史は非常に身近に感じていました。1972年、世界遺産条約は、ユネスコ総会で満場一致で採択されます。ところが、日本は中々批准しない。1992年、やっと批准するのですが、それまで20年かかっています。私も、何度も日本政府に批准の働きかけをしたのですが、その時、毎日新聞が特集記事で取り上げるなどサポートをしてくれました。そんな関係で、パレスサイドビルにはよくお邪魔していましたので、世界遺産アカデミーには多少の縁を感じています。

今回のテーマは、「ルネサンスとは何か」です。

はじめに問題設定として2点、

- ・ルネサンスとは人間解放の輝かしい歴史であったのか。
- ・ルネサンスは人類史をどのように変えたのか。

を上げておきたいと思います。



『エヴァの創造』

【ミケランジェロに見るルネサンスの代表作品】

システィーナ礼拝堂の外観と内観を見ながら、何点か確認しておきましょう。



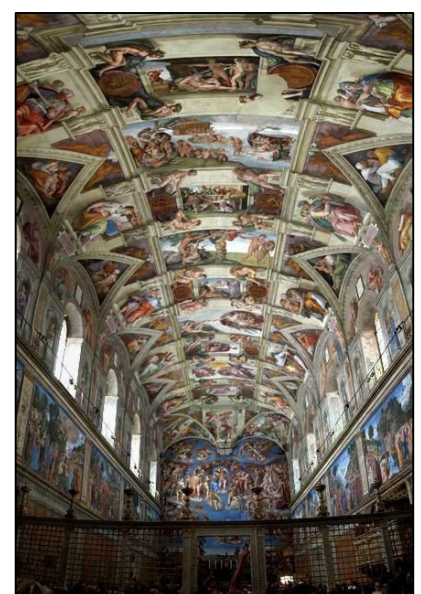
システィーナ礼拝堂の外観

システィーナ礼拝堂は、バチカン宮殿内の礼拝堂です。

ミケランジェロの天井画、そして祭壇画「最後の審判」はルネサンス美術の代表的絵画として有名です。

天井画は、「創世記」にある9つの場面を描いたものですね。

創世記は、「モーゼ五書」の冒頭の書です。



システィーナ礼拝堂 天井画

「旧約聖書」の最初におかれたモーゼ五書ですが、実は旧約聖書と言うのはキリスト教徒が新しい契約とする「新約聖書」に対して「旧約」、と言っているだけで、ユダヤ教徒にとっては唯一の聖典すなわち聖書です。また、モーゼ五書は「トーラ」とも呼ばれます。創世記には民の始祖、アブラハムが登場します。アブラハムは、絶対神ヤーヴェと最初の契約を結びますが、その後、ヤーヴェはアブラハムの息子を生贄として捧げることを求める。アブラハムは悩んだ末、神ヤーヴェの命令を受け入れます。実はこの息子は、アブラハムが 100 歳を超えて初めて授かった子供でした。この子供を生贄にしろ、というのはいかにも不条理ですよ。この不条理が、モーゼ五書＝トーラの根本を形成しているのです。不条理ではあるのですが、ヘブライズム(古代イスラエル民族の価値観)の根本は神に対する絶対服従です。最終的には息子イサクは助かりますが、この不条理の中の絶対服従は、後にイスラームにまで至るもので、一神教の根底に存在するものです。



システリーナ礼拝堂 祭壇画

『最後の審判』

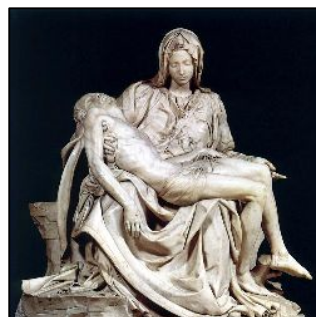


サン・ピエトロ大聖堂の外観



建物に目を移してみましょう。現在のサン・ピエトロ大聖堂は、16～17 世紀に再建されたものです。ミケランジェロも主任建築家の一人に名を連ねますが、後期ルネサンス、そして初期バロック建築の代表ともいわれる建築物です。有名な列柱廊を持つ円形広場はベルニーニの手によるもので、初期バロック建築の代表です。

そして、彫像、ルネサンスを代表する彫像と言えば、サン・ピエトロ大聖堂にあるミケランジェロのピエタ像ですね。ミケランジェロは、生涯に 4 体のピエタ像に着手していますが、完成品は「サン・ピエトロのピエタ」1 体ですね。「ピエタ」とは「慈悲」を意味します。十字架から降ろされたキリストを胸に抱く聖母マリアの慈悲を表す彫像なのですが、第 4 のピエタ「ロンダニーニのピエタ」に注目してください。これは、ミラノのスフォルツァ城博物館にあります、中々恐ろしくも感動的なピエタです。



『サン・ピエトロのピエタ像』



『ロンダニーニのピエタ像』

(第 4 のピエタ)

ご覧の通り、このピエタは、聖母マリアが背負われています。これは死せるキリストが、疲れ切った母マリアを背負い立ち上がる場面です。死からの復活、そして疲れ切ったマリアの人間味あふれる表情、まさに“ルネサンス”そのものかもしれません。

ミケランジェロの代表的彫刻と言えば、他にも「ダヴィデ像」「モーゼ像」があります。モーゼ像をご覧ください。モーゼが手に持っているのは神から授かった「十戒」を記した石板です。モーゼは、エジプトからユダヤの民を脱出させ、約束の地カナンに向かう途中、シナイ山で神から十戒を授かります。十戒を授かるためにモーゼは、四週間シナイ山に籠りますが、十戒を授かり、シナイ山から戻ってみると、そこでは、モーゼが助けたユダヤの民たちが、金の仔牛の周りで踊り狂っています。ユダヤの民たちは、四週間もモーゼが戻らないため、モーゼは帰らない、ヤーヴェはいないと考え、エジプトの神を象徴する「仔牛」を造り、信仰対象をエジプト時代の神に戻そうとしていたのです。それを見たモーゼは烈火のごとく怒ります。このモーゼ像はその時の怒りの表情のモーゼで、この後、モーゼは十戒が刻まれたこの石板を仔牛に投げつけるのです。石板は、粉々に砕けます。十戒の言葉はモーゼが別の石板に書き直すのですが、神から頂いた大切な石板を投げつけるほどの怒りに震えるモーゼ像が、この彫刻です。これも、人間的な話ですね。



『モーゼ像』



『金の仔牛の崇拜』(ニコラ・ブッサン画)

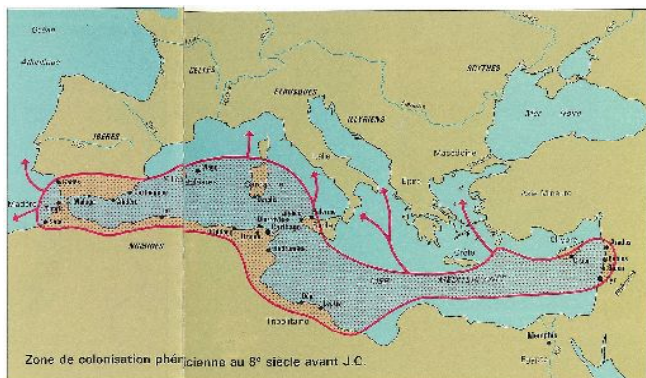
【ルネサンスの意味】

さて「ルネサンス」です。Renaissance とは Re-naitre の名詞、つまり再び生まれること、「再生」です。では何が再生したのか。それは古代ギリシア的人間観であり、ギリシア的理性の再生です。14 世紀末に始まり、15 世紀イタリア、16 世紀フランスで花開く文明がルネサンスですが、これは「ヨーロッパの変貌」を意味します。カトリックを絶対とする中世ヨーロッパの価値観からの転換であり、17 世紀の科学革命、18 世紀の啓蒙主義と産業革命を準備するために必要だった「変貌」です。

【ヨーロッパの起源】

ここで、ギリシア神話からヨーロッパの起源を考えておきましょう。

「ゼウスはチュロスのフェニキア王の娘エウローペーの美しさに一目惚れし、牛に姿を変えて誘惑する。エウローペーは海を渡りクレタ島に至りゼウスとの間に、後に王となるミノスを身ごもる。」というギリシア神話。注目すべき点は、ヨーロッパの根源とも言えるギリシア神話の最高神ゼウスが一目惚れした相手は、フェニキア王の娘エウローペーである、ということです。フェニキア人は地中海東部、今のシリア・レバノンといった一帯を発祥地とします。つまりはオリエントです。そして、オリエント＝エウローペーは、海を渡りクレタ＝ミノア文明(エーゲ海文明)に出会うわけです。オリエントの語源はラテン語の「Oriens＝日が昇る(方角)」で、ローマ人は「光は東方より」と言いました。ヨーロッパの起源にオリエントは不可欠なものです。



前8世紀におけるフェニキア人の勢力範囲
(Atlas de la decouverte du monde ,Fayard より)



200C.E.頃のローマ帝国、人口約 6,000 万人
(Atlas de la découverte du monde, Favard より)

フェニキア人は、海洋交易の民でした。地中海沿岸各地に都市国家を築き、紀元前 8 世紀にはフェニキア人の勢力範囲は、地中海を網羅していました。そして、カルタゴ帝国が出現します。地中海に造られたこの「フェニキアの道」は、都市国家ローマがローマ帝国へと勢力拡大していく道筋の基礎となりました。フェニキアの道を踏襲したローマ人は、ギリシア・エジプト文明に出会います。そしてガリア＝ケルトを制圧する中で、ケルト文明とギリシア・エジプト文明が出会っていくのです。つまりオリエントを抜きにしてヨーロッパは考えられないのです。

【ヨーロッパ文明の形成】

もう一つ、ヨーロッパ文明の生成は、理性と信仰の合体を起源とします。すなわち、ヘレニズム＝ギリシアの理性とヘブライズム＝ユダヤ教及びキリスト教の信の合体があるのです。そして、4 世紀、アルメニア・エチオピアに続き、ローマ帝国がキリスト教を公認することで、ローマ帝国＝西ヨーロッパは急速にキリスト教化していきます。4 世紀から 5 世紀、ローマ帝国＝西ヨーロッパの価値観の中心は、キリスト教でした。そのローマ帝国は 395 年、東西に分裂、価値観の中心はバチカンからコンスタンチノーブルにシフトしていきます。さらにゲルマン民族の移動により、西ローマ帝国が 476 年に滅亡します。コンスタンチノーブル＝東方正教会は、東ローマ帝国＝ビザンツ帝国の隆盛の中、別の文化圏を形成していきますが、西ヨーロッパは「暗黒の中世」といわれる時代を迎えます。暗黒の時代、西ヨーロッパは、その求心力をキリスト教(カトリック)に求めます。西ヨーロッパの中世において、カトリックの神聖は価値観の中心で、まさに絶対的なものでした。そして、12 世紀ルネサンスの立役者となったイスラームのインパクトにより、14 世紀の後半、ルネサンスが始まるのですが、この 12 世紀ルネサンスとイスラームの関係は、後ほど解説しましょう。



『ヴィーナスの誕生』

ルネサンスでは、先程もお話した通り、ギリシア的なものが再生されていきますが、中世の絶対的価値観＝カトリックへの過度な反発からか、西ヨーロッパの出自を古代ギリシアだけに求める風潮が生まれます。この時、ユダヤ・キリスト教の信の根本とも言えるオリエンの存在が消し去られていきます。さらに、東ローマであるビザンツ文明さえもヨーロッパにあらず、とされます。

ルネサンス以降のヨーロッパ人にとって、古代ギリシア文明が経験したオリエンとの邂逅＝ヘレニズムは忘れ去られ、あたかもボッティチェリの「ヴィーナスの誕生」のヴィーナスのように、地中海の泡から突如誕生するのがギリシア文明となっていくのです。

【ロゴスとトーラ】

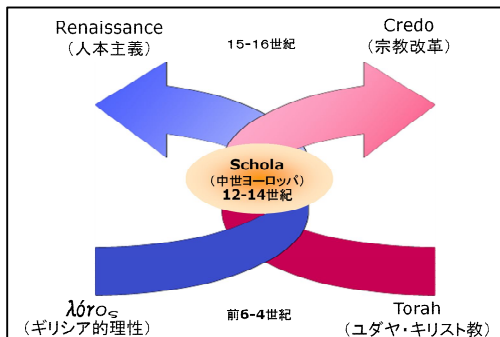
前述したように、ヨーロッパの形成にオリエンは欠かせません。

ヨーロッパをイメージで表現すれば、それは、このシャネルのロゴですね。

紀元前 6～4 世紀頃に、ギリシア的理性ロゴスと、ユダヤ・キリスト教的不条理トーラ（モーゼ五書）が出会い、ヨーロッパ文明が形成されていきます。



シャネルのロゴ



ヨーロッパのイメージ

中世、キリスト教的価値観がヨーロッパを支配する中、12～14 世紀、理性で神を考えようとするスコラ哲学が生まれます。スコラ哲学は、ロゴスとトーラという異質な価値観の合体には不可欠な哲学で、学と信の止揚の頂点とも言えます。しかしもともと相容れないものの合体は長くは続きません。そして、時代は近世に向かう中、しばらくは自然科学と神学との間の矛盾を二重真理説で切り抜けるのですが、15～16 世紀には、理性ロゴスを中心価値とする Renaissance (人本主義) と、不条理トーラを根本にもつ宗教を見つめ直す Credo (宗教改革) の原理主義が興り、ロゴスとトーラの再分離が始まりまったのだと私は見えています。宗教改革もこのように理解せねばなりません。

ここで、視点をもう一度古代に戻しましょう。

キリスト教のもとにもなるユダヤ教においては、ユダヤ人が経験したバビロン捕囚も見逃してはいけません。

紀元前 6 世紀、ユダヤの民は、新バビロニアの王によりバビロンに連れ去られ神殿も破壊されます。

そして半世紀が経ち、ユダヤの民を捕囚から救ったのは、アケメネス朝ペルシアのキュロス 2 世でした。

ユダヤの民とキュロス 2 世との出会いは、ユダヤ教の価値観とゾロアスター教の価値観の出会いを意味します。

ゾロアスター教は、光と闇の二元論を根本に持ち、光の神、アフラ・マズダーと闇の神、アンラ・マンユの戦いをこの世の現象の根本とします。ゾロアスター教における神同士の戦いには、それぞれ家来がつかます。

わかりやすく言えばチェスのイメージですね。キリスト教に大天使、小天使といった、絶対神と人間の間を取り持つもの達が存在する背景には、ゾロアスター教とキリスト教の習合があります。

さらに、サタン＝悪魔の存在。神が絶対であるはずの一神教に、なぜ神にそむくサタン＝悪魔が存在するのか？

実はサタンは元々大天使でした。それが失墜して悪魔になったのです。元々が大天使ですから、

神に近い存在だったわけです。このような位置づけにもゾロアスター教の二元論の影響が感じられます。

さらに、バビロン捕囚においては、Ecritura＝編纂作業が活発に行われます。元来、ユダヤ教において、

神との契約内容は口頭伝承でした。捕囚中のユダヤ人は、自らのアイデンティティーを確立する必要性と、

後世への確実な伝承を目的に、編纂＝書くことを始めたようです。これが the Bible、聖書の成立につながるのです。

その意味でバビロン捕囚は、ヨーロッパ文明の成立にも大きな影響を与えた出来事でした。

……第2回へ続く。

※画像データ出典:2011 年5月 28 日(土)服部英二氏特別講演会資料より